

福井

「福井全研ニュース最終号」

「ぽ〜れぽ〜れ 11 月号」福井県版特別号

発行日 平成 30 年 11 月 25 日
編集・発行 公益社団法人 認知症の人と家族の会 福井県支部
事務局 〒910-0017
福井市文京 2-9-1 嶺北認知症疾患医療センター内
TEL : 0776-28-2929 FAX : 0776-63-6756
E-mail: monowasure@fmatsubara.com

皆さんの力で「感動! 感動! の福井全研」ありがとうございました



全研. 大変お世話になり
ありがとうございました。
感動の連続でした。
「本人」の方の思いが、
ピンピン伝わってきました。
今までの、とらえ方が
まちがってました。
人としての生き方も、学び
ました。
ありがとうございました。
10/30 坂上



全研集会史上最高の参加者が会場を埋め尽くし、オレンジの T シャツのボランティアが大会を支えました。認知症の人と家族を県民みんなで支える縮図でした。(写真上)

感動！感動の福井全研を 皆さんの力でお願いします。

28 日の全研集会、皆様の方で大きな感動を呼び起こしていただきたいと思います。

そして、その感動が介護を続ける活力、社会を変える原動力に結びつくことを願っています



このようなお願いを全研ニュース 10 月号でさせていただきました。

そして、まさしく「感動！感動」の福井全研を史上最高の参加者、基調講演の中村伸一先生、「とことん語ろう認知症」の町永先生をはじめとした登壇者の皆様の方で作ってあげていただくことができました。

心から皆様方にお礼を申し上げたいと思います。

全研ニュース 11 月号では、まず、県支部代表 松原 六郎から皆様方へお礼とお願いをさせていただきます。

次に、町永俊雄先生の「認知症の人と家族の会 全国研究集会・福井」レポート、本部顧問の勝田登志子さん、本部理事 鎌田松代さんの福井全研参加の所感を紹介させていただきます。全研に参加していただけなかった皆様には、3 名の先生方からのレポート、所感から福井全研のを知っていただきたいと思います。

3 名の先生から「レポート、所感」という形で福井全研を評価していただきました。

今後の支部活動の指針とさせていただきます。

ありがとうございます。

福井全研ニュースは今回の 13 号をもって最終号にさせていただきます。

多くの皆様方に福井全研ニュースを読んでいただいているということが、

私ども福井県支部にとって大きな力になりました。

改めてお礼を申し上げます。



「お礼 本番はこれからやざ」

福井県支部代表 松原 六郎

この度、第 34 回認知症の人と家族の会全国研究集会、全国代表者会議に多くの会員の皆様に福井の地までお越しいただき誠にありがとうございました。お陰様で無事終了することができました。

これもご来賓の皆様、会員の皆様のお陰と心から感謝申し上げます。

当日、至らぬことも多々あったとは思いますが、どうかお許しを願いたいと思います。

2 年前、「福井で全研をやらせていただけないでしょうか？」と突然のお願いに、本部の方々も周囲の皆様もびっくりされて、自ら申し出た我々に「大丈夫なの？」という顔をされながらご承諾いただいたこと本当にありがたく思い出されます。

最初に思ったことは、もちろん全国からお集りの会員の皆様に福井らしくお招きしたいということでした。

しかし、同時に支部設立 10 年という小さな県の小さな組織を強化したいという思いがありました。

また、2025 年が間近に迫る今こそ県民の心に火をつけて、認知症になっても暮らせる街づくりを始めたいという思いも湧いてきたのです。

これは、福井県支部創立者の故前川久子さんの夢でもあったからです。

この思いを抱いて準備を開始、「紡ぐ」というテーマはすぐに決まりました。

また、「今からやざ認知症」という副題は、今からだよ、今からですよ、の福井県の方言なのです。

幸い若い人たち力が中心となって準備をしてくれました。

「駅の改札口にある恐竜博士にオレンジリングをつけよう。」とか、「風船を使ったバルーンアートでロボ隊長を作ろう。」とかアイデア満載でした。

また、県の担当の人も、市の担当の人も完全に

仲間の中に融合して活動してくださいました。

1600 人という人を集めた苦労は私たちの誇りです、でも、本当に自慢は内容です。

午前中の中村伸一先生の講演、午後の町永俊雄さんの司会、丹野智文さんのお話、後ろに陣取っていた看護学生さんたちが感動して聞いていたのが今でも忘れることができません。

きっと、来てくださった皆さんの想いはあの看護学生さんたちや来てくださった福井の人たちを通して、明日の街づくりに良い結果を出すに違いないと思っています。

キックオフミーティングは終わりました。

本番はこれからやざ。と、少々疲れた自分に言い聞かせています。

皆さま本当にありがとうございました。

これからも、福井県支部のこと、どうかよろしくお願い申し上げます。



認知症の人と家族の会「全国研究集会・福井」レポート

コラム

町永 俊雄

10 月 28 日、福井で認知症の人と家族の会の「全国研究集会」が開かれた。

全国から約 1600 人という空前の参加者と規模の全研集会だった。

「認知症フォーラム.com」ピックアップ「認知症の人と家族の会 全国研究集会・福井」レポートを町永俊雄先生、認知症フォーラム.com 様のご了解を得て転載させていただきます。

全研集会とは

認知症の人と家族の会を、セルフヘルプグループ、自助組織としての側面だけで捉えるのは十分ではない。実はこの全研集会はもう 34 回を数える。

家族の会ができたのが 38 年前の 1980 年だから（当時、呆け老人をかかえる家族の会）、発足後まもなく 1985 年には全研集会が持たれ、1988 年からはすでに全国持ち回りでの開催となっている。

この集会には家族だけではなく、専門職、ボランティアなど誰もが参加でき、小さくとも先駆的な研究、実践が発表されるという社会へ開かれたユニークな研究集会である。

家族の会は結成当時から、全国組織として社会活動も視野に入れての誕生だったことを考えると、これからの認知症の課題のみならず、この社会の方向性を見極めるためにも、この日本最大の認知症関連団体の動向を注視し、検証していくことが必要だろう。

福井での全研集会を単なるイベントではなく、どんな方向性が伏流しているのかは、それに先立って一年も前から毎月発行されてきた福井全研ニュースという双方向の声を反映する機関紙に現れている。

例えば、1 回目には福井県支部の松原六郎代表が、全研集会への思いとして、ここから市民運動を起こしたいと述べ、それを受ける形での投稿記事には、これまで語ることの少なかった「偏見と差別」を取り上げる内容が載っている。

ここにすでに新たな機運への胎動がある

オレンジのロバと若い力

今回の全研集会のテーマは、「紡ぐ（つむぐ）～地域力を活かし本人と家族が主役の社会へ～」というもので、



ここでのキーワードは「地域、本人、家族、そして社会」である。

若干の総花的印象を持つが、家族の会単体の活動を超え、大きく社会総体から絞り上げるようにして、「紡ぐ」というテーマで広範な市民運動へと繋げようとしている意図が読み取れる。

が、どんな立派な理念でも、現実と「紡ぐ」ことがなければ浮遊するだけだ。

具体としての「紡ぐ」形は、駅や街頭に示された。

駅の土産物などを扱う店のあちこちにオレンジ色のロバのマスコットが置かれている。

ロバは認知症サポーターのマスコットキャラクターである。

店の人に聞くと、観光客から「これは何？」と尋ねられることもあるという。

当然、そこから認知症についての一言二言が交わされる。

そのためにはまず地元のお店の人に「認知症」のことを知ってもらいながら、ロバのマスコットの配置をお願いしなければならない。

市民運動の始まりは、池に投じた小さな一石である。波紋がさざなみとなり、大きなうねりとなる、かもしれない。

そして駅頭には、朝から大きなオレンジ色ののぼりとお揃いのオレンジの T シャツのお迎え隊が並び。

アテンドに走り回り、案内し、そして行き交う人にそのオレンジの存在で「認知症」を語りかけた。

全研集会には多くのボランティアが関わった。若い人が多い。

彼らはどんな思いで参加し、そして認知症の人や家族と交流し、どんな認知症観に触れたのだろう。

家族の会の会員数の減少や高齢化が言われる中で、彼ら彼女たち若い世代の参加は心強いと同時に、これからの共生社会に向けて「認知症」が切り拓く確かな未来だろう。

ボランティアとしてだけでなく、全研集会の壇上で若い世代と認知症の本人、家族がのびのびと語り合う場が設定できたらいい。それはぜひ目撃したいものだと思う。

| 本音トーク

「本人の思い」と「家族の思い」

私が関わったのは、特別対談。タイトルがすごい。「とことん語ろう認知症 ～本人、家族、地域の本音トーク全開！～」というものだ。家族の会の発想としては斬新な試みとあっていい。ここでも企画の段階から若いチームが関わっている。

家族の会の鈴木森夫代表や、福井県支部の松原六郎代表からも「好きにやっていい」「責任はこちらが取る」との言質をもらったと、担当者は言う。

何か、幹部の心中深くに、イノベーションの思いが込められていたのかもしれない。

それだけに新しい試みをするにどう踏み出すのか、若いチームでの討議を重ねたという。

演出もさることながら、踏み出したテーマは、やはり「本人の思い」と「家族の思い」の本音トークだろう。

だから、丹野智文さんなのである。

丹野さんは本人発信の中で常に「自立と自己決定」を求め、「偏見、差別、権利」にも触れ、とりわけ支援については「守ってあげるということは、お世話の対象にされることであり、出来ることも先周りのお世話の中で奪われることになり、結果、『出来ない人』とされていく。できることを奪うな」と鋭く指摘している。

壇上で、丹野さんに私は尋ねた。

「でもね、家族もなんとかしてあげたいと思ってお世話するのではないですか」

丹野さんは一言答えた。「余計なお世話です」

トークの採録には誤解を生む恐れがある。文字だけで記せば刺激的な言葉もその軽やかな笑顔、表情と合わせて受け止めないと、発言者の本意から離れてしまう。実際にこの時も会場からはドッと笑いが湧き起こった。

こうした本人の思い、家族の思いのズレは語り合うことが大切だ。語り合って分かり合えるといった短絡的な調和点を求めるのではなく、それぞれの「つらさの違い」を知ることが必要だ。

家族の介護体験は、会場が息を呑む思いだったろう。

母を介護した男性。「追い詰められていく自分を意識しつつもどうしようもない。思わず母の首に手をかけた。本人と自分とのコンフリクト（摩擦、ぶつかり合い）の中にしか日常がなかった」

母を介護する女性。「排泄の失敗に、自分がキレた。虐待介護、暴言介護、結構だ。そう言い散らすことでかろうじて自分を保てた」

これも活字体で接すると誤解を生む。いずれも深沈とした自分の思いに、いつくしみや悲しみ、自己嫌悪の情が混じり合い、わかってもらいたいとわかってもらえないだろうという揺れ動く中の発言なのである。よくぞ率直に話していただけた。

| 「誰も責められない」を問う

それでもなお、家族の会として向き合うべき現実も浮き彫りになった。

ここからは慎重に記すのだが、介護家族のギリギリの切ない思い、つらい思いに満ちた介護は、誰も責められないだろう。私も責めることは出来ない。

ではそのことで認知症の本人のつらさの行き場はどこなのか。誰も責められはしないという免責を与えることで、介護される本人の言葉にならないつらさは誰が引き受けるのか。

本人もつらいだろうが、家族だってつらいのだ、というつらさの同量をもって、互いのつらさは相殺されるのか。

それは、この瞬間にも生まれる新たな認知症の人と家族に、同じつらさの年月を過ごさせることにつながる。

それは、認知症の本人誰もが、診断された後に長い年月を不安と嘆きの中で過ごさなければならない現実とどこか呼応する負の現象だ。

誰かが、こんな「認知症」の現実はあるとはならないと言明しなければならない。責められるべきはだれか。

それは、介護家族の切ない思いを責められないものとして放置する、私たちすべての怠慢ではないのか。

私たちの怠慢ではないか。その厳しい自己検証があっではじめて、介護の社会化の必然と公的責任の不在を指摘できる。

そのために、静まりかえったあの壇上で介護家族は自身を指弾するように、身を切る思いで聴衆と社会へ問いかけたのだ。

「自分ごと」として考えるというのは甘くはない。覚悟と決意を伴う。

全研集会はこの社会のともし火であってほしい。そのためにも、自分の心と社会の深部を覗き込むようにしてうなだれる経験をしなければならない。一年に一度、心底から「これでいいのか」という真摯な検証の場があっていい。そのことを語り合い共有できる場であってほしい。

全研集会が始まった 80 年代半ばは、まさにバブル絶頂期だった。

日本が経済成長を駆け上る陶酔の中で、認知症の人と共にある人々は直感的にこの社会の危うさを感じ取った。

小さな声、弱い者が押し潰されないか、これでいいのか、そう感じ取ってこの社会総体の補完機能として、小さくとも確かな声を発信する場が必要だと、1985 年、繁栄の大合唱の片隅にこの全研集会は生まれた。私はそう思う。

つむぐ一本に、きっと涙でじっとりと濡れた糸がある。希望のタペストリーを織り上げる時、そのことを思え。

| 第 84 回 2018.10.31 |



「福井県支部へのエール」

福井県支部の仲間、関わった多くの方たちに「研究集会成功」に感謝の拍手を贈ります。
成功は「熟練した仲間と若い力の総合力！」

「認知症が自分事として感じられるまちづくり」の第一歩。

この熱い思いを福井県から全国発信へ、運動体として家族の会らしい活動の持続を！

何よりも認知症の人や家族をとりまく環境を整える事で日常生活を豊かに

「本人も家族も仲間たちも共に楽しむ」そんな癒しの場づくりを大切にしていきましょう！

全研会場で勝田登志子さん(現家族の会本部顧問)にお会いしました。その場で「福井全研の評価」をお願いしたところ福井県支部の「生みの親 育ての親」の立場で心のこもったメッセージを頂きました。『福井県支部へのエール』とタイトルを付けさせてもらって紹介します。

あれは3年前、栃木県で開催された研究集会の昼食時、松原代表と坂田事務局次長から「福井県で研究集会を開催したい」と聞いたとき、正直驚いた。

「えっ本当に!」と思った。

その後、本部の理事会などを経て開催決定したものの、今の体制で大丈夫かしら・・・と思った。

福井県支部の立ち上げに関わった一人として、福井県支部は分身のように感じていたからなおさらのことだ。

何よりも松原代表の決意は固く、前川代表から引き継がれての思いの強さを思った。

これは松原代表から前川初代代表への大きな贈り物なのだ。

準備会から関わった世話人たちと結成後加わった世話人たちの思いはどうなのだろうと思いながら見守ることしかできなかった。

「もっと若い力を中心にしないと・・・」など松原代表に進言したこともある。

松原代表は医者らしからぬ？ 腰の軽さというか、積極的にそれまでのつながりを大切にしながら、自分が参加できない会議にはビデオレターなどを駆使して参加を呼び掛けられた。

その熱意が回りを熱くし、その輪が大きく広がったこととは言うまでもない！熟練した仲間と若い仲間の力が融合して、ますますその輪は広く深く、関係者に伝染？していった。

準備段階では毎週の「Web 会議」で連絡を密にして忙

しい世話人や実行委員たちの参加意欲を高めたのも新しい取り組みとして、見習うべきだと思った。

いよいよ 研究集会を迎えた。会場を埋め尽くした人たちの明るい顔が印象的だ。

家族の会の集まりに若さがみなぎってエネルギーの大きさを感じた。

一方、少し体の不自由な高齢者を同行しながら参加された多くの方々もまた、晴れ晴れとした表情だ。総合力だなあと懐かしい方々と握手を繰り返した。

準備会当初、福井県内のあちこちを回った。

京都から山越えすれば近いという名田庄（現在はおおい町）に出かけた折、小さな「つどい」を開き家族の会への入会を訴えた。

その折の懐かしい方々にも会えた。

そこで活躍する中村医師の基調講演は本当に面白く笑い「味噌汁のはなし」にはじんわり胸が詰まった。

本音トークの町永氏の進行や丹野さんの誠実な話に「そうだ、そうだ」と相槌を打ちながら、丹野さんがはじめて参加した「本人交流会・笹川のどい」で自身の病気について初めて話された当時の泣き顔が重なって見えた。

大成功した今回の全国研究集会に関わった家族の会や関係者の方々に感謝の拍手を贈りたい！本当にありがとう！

松原代表の「ここからスタート」という決意表明も嬉しかった。

ここからが本当の底力が試されると思う。結成 10 周年でやり遂げたひとつの宝物だ。と同時に参加できなかった多くの本人や介護家族に思いを馳せる。日々の暮らしのなかにこそ介護があり、生きる日々がある。

富山県支部は結成 36 年、今年は「本人も家族も仲間たちも共に楽しむ」ことをモットーにつどいやカフェを開催している。家族の会の役割は何であろうか！と考える。支える、支えられる関係から共に楽しみながら生きる仲間として、認知症という病気への差別と偏見はあるが、環境を整えることで病気は克服できる。

そのなかで「笑顔」を忘れないで生きる日常生活の中に癒しを感じてもらえる場づくりかもしれない。

福井県支部が取り組み成功させた研究集会は「認知症が自分事として感じられるまちづくり」の第一歩となったことは確実である。

この成功を一過性にしないで持続的に運動体として福井県から全国に発信していくことを期待したい。

今後も共に学びあいながら、家族の会だからこそできることを大切に、本人、家族、仲間たちと楽しむ時間を共有したと強く願っている。

福井県支部の仲間、ありがとう！

「家族の会」全国研究集の新たな道筋をしめした福井全研

先駆的なケアを広く社会に普及から始めた全国研究集会は、本人と家族が主体での地域とのネットワーク創りを考える集会へ

本部会報「ぼーれぼーれ」の編集長を 10 年余された本部理事の鎌田松代さんは福井全研をどのように受け止めて下さったのか？

そんなことを書いてくださいとお願いしたところ「本当にすごい画期的な全国研究集会をしてくださいました。そんな福井全研の感想ご依頼、光栄です。書かせていただきます」と快く引き受けてくれました。

そして、そのタイトルなんと『新たな道筋をしめした福井全研』でした。

全国研究集会の新たな方向性

開催日だけでなく、準備の段階から、そして終了後も続いていく内容と、連携の全国研究集会（以下全研）でした。

それを若い世代を中心おいて、ベテランがサポートしての体制で取り組まれていました。実行委員会では福井県支部の松原六郎世話人代表は「好きにやっさい」「責任はこちらが取る」と言われていたそうです。

若い実行委員が松原代表が示した目標に向かい、新たなものを創生されていることは全研ニュースからなどからも伝わっていました。

認知症を知る書籍をまとめた図書館の認知症コーナー、認知症の人にやさしいお店であるこの証明のオレンジロバ、多くの事業所、専門職、行政関係機関を巻き込んだ大所帯の実行委員会、当日ボランティア、100 名近い看護学生の聴講……。

福井全研に参加し「認知症になっても安心して暮らせる社会」実現を実感させるものでした。

開会式には西川一誠福井県知事、東村新一福井市長が揃って挨拶をいただきました。

これまで開催地では代理の方が多かっただけに、福井県・福井市の認知症への行政の意気込みを感じました。

特別対談で本人と家族の思いが交錯

特別対談「とことん語ろう〜本人、家族、地域の本音トーク全開!〜」は聴きごたえたっぷり、あつという間の 110 分でした。

5 名の本人が発言されましたがその言葉一言、ひとことがこれからの認知症とともに生きる道すじを教えてくれています。

丹野智文さんは「家族に迷惑をかけている。申し訳ない、迷惑をかけている。と思う気持ちがある。だから家族に反発できない認知症の人達である。家族は、守らないといけなく存在と本人を見ている。しかしそれは大きなお世話だし、『もの忘れはするな』と言われているように感じる。社会全体が『認知症の人は守る』と思込んでいる。

守らないといけなく存在に認知症の本人がなくなってしまっていて、**出来ることをサポート**しようとはなっていない。

『弁当の蓋を開けて、箸を割る。“出来るのに、待ってくれない”『パパのチャック閉まっているか見てあげなさい』手を挙げると BPSD となる。

本人を前に家族が『この人は何も出来ない人なのです』と言う」守らないといけなく存在でなく、出来ることをサポートする社会としたい。」

曾根勝さんは「診断後引きこもった。自分は変わらないのに周りが変わった。私に出来ることがあったら何でもやりたい。したいのに出来ない自分が嫌になった」

山中圭一さんは現在就労中で声での出演でした「先の事を考えると不安。家族が心配だから登壇はしなかった」

介護家族の濱崎久夫さん、渡辺厚子さんからは介護で追い詰められ、思わず手を挙げてしまった時のことが語られました。

2017 年 ADI 京都国際会議の中では「認知症の本人」に多くのスポットが当てられました。

介護家族者は嬉しい反面、家族が本人の自立を阻害するような存在であるような発表や報道もされているように受け止めていました。

さびしくむなく、「家族も支援をうける存在」では…との思いをしました。

なぜ家族がそうせざるを得ないのかへの言及がないのです。

今回のトークでもそこは語られなかったです。

語られたけど、本人の「余計なお世話です」に「家族はなんとかしてあげたい、また社会の偏見から守りたいと思ってお世話するのではないですか」は飛んでいました。

母が同窓会に参加した時、何度もトイレや同じことを聞くので迎えに行ったときは、疲れ切り、もう来ないで表情の幹事さんでした。

同じことを何度も言いますとは伝えていたのですが。認知症の病気を理解し、対応を知っていることで本人も家族も同窓会の幹事さんもハッピーでその場を過ごせます。

「何をするかわからない人」、「認知症だから」などの差別的な見方がなくなるのは、周囲の認知症への理解があれば解消できるのではないと思っています。が、この理解は奥が深いです。また認知症の人はひととして生きていること、その権利を守るという基本的人権への考えも同時に必要でした。

そんなことを町永俊雄福祉ジャーナリストの軽妙な進行のもと、これからの認知症の人と家族への支援、認知症支援について考えさせられた対談・全研でした。

先駆的な認知症ケアや取組を社会に発信から始まった全研は、「認知症にやさしい地域づくり」で「認知症でも安心して暮らせる社会」に向かい、開催支部と認知症に関わる関係機関事業所などの連携・ネットワークづくりの種を蒔き大きく育てる緒になっています。

